

氏名(本籍)	高橋 信博(大阪府)
学位の種類	博士(鍼灸学)
学位記番号	鍼博甲第68号
学位授与の日付	平成28年 3月15日
学位授与の要件	大学院学則第34条第1項および学位規程第5条第1項該当
学位論文題目	遠隔部経筋治療の効果の基礎的検討 一手の太陰経筋病態モデルにおける榮穴(魚際穴)への円皮鍼刺激の効果について
論文審査委員	(主査) 角谷 英治 (副査) 北小路 博司 (副査) 和辻 直

## 論文内容の要旨

### 【目的】

遠隔部経筋治療の有効性とその発現様式を明らかにするために、ヒトの経筋病態モデルにおいて榮穴への円皮鍼が筋痛に及ぼす影響を検討した。

### 【方法】

手の太陰経筋病態モデルとして、伸張性収縮運動負荷により上腕屈筋群に遅発性筋痛を作製し、クロスオーバー法にて(n=8)、運動負荷 24 時間後に同側の榮穴の魚際穴へ円皮鍼または偽円皮鍼を貼付した(無介入群も設定)。

肘関節の屈曲時および伸展時の痛みの強さと痛みの出現角度の評価を介入直前、介入直後、12 時間後、24 時間後の 4 時点で行った。

### 【結果】

屈曲時痛の強さ、伸展時痛の強さ、伸展時痛出現角度において、円皮鍼群は介入後の経時的変化が偽円皮鍼群、無介入群とは有意に異なり減少パターンを示した( $P < 0.001$ )。群間比較では伸展時痛出現角度において介入 24 時間後で円皮鍼群が有意に低値を示した( $P < 0.01$ )。

### 【考察・結語】

円皮鍼群が屈曲時痛、伸展時痛の強さ、伸展時痛出現角度において減少パターンを示し、貼付 24 時間後に伸展時痛出現角度が有意に低値を示したことより、経筋の異常に対して遠隔部(榮穴)への円皮鍼が貼付後早期から鎮痛効果を生じさせる可能性が示唆された。

## 論文審査の結果の要旨

鍼灸治療は長い歴史の中で様々な治効理論が考案され、時代とともにアレンジされながら現在に至っているが、その治療体系、有効性のメカニズムの詳細は科学的には不明な点が多い。そこで本論文は、運動器に対する東洋医学の経筋理論に基づいた遠隔部経筋治療の有効性とその発現様式を明らかにするために、ヒトの経筋病態モデルにおいて榮穴への円皮鍼が運動時の痛みに及ぼす影響を検討したものである。

研究では、手の太陰経筋病態モデルとして、伸張性収縮運動負荷により上腕屈筋群に遅発性筋痛を作製し、クロスオーバー法にて、運動負荷 24 時間後に同側の榮穴の魚際穴へ円皮鍼または偽円鍼を貼付し（二重盲検法）、肘関節の屈曲時および伸展時の痛みの強さと痛みの出現角度の評価を運動負荷前から 24 時間後（介入後 24 時間）の 7 時点で測定し評価した。

今回の結果では、屈曲時痛の強さ、伸展時痛の強さ、伸展時痛出現角度において、円皮鍼群は介入後の経時的変化が偽円皮鍼群、無介入群とは有意に異なり減少パターンを示し ( $P < 0.05$ )、群間比較では伸展時痛出現角度において介入 24 時間後で円皮鍼群が有意に低値を示し ( $P < 0.01$ )、経筋の異常に対して遠隔部である榮穴への円皮鍼が貼付後早期から鎮痛効果を生じさせる可能性が示唆された。この鎮痛効果の機序としては、筋痛の部位と円皮鍼の刺激部位との関係から脊髄分節的な機序が最も考えやすいとしている。

以上の結果は、榮穴へ鍼治療を行う遠隔部経筋治療が、主に鎮痛効果により運動時の症状（痛み、引きつり）を改善させることを示唆するもので、新しい知見として、遠隔部の鍼灸刺激の効果、作用機序の解明とさらなる発展に寄与するものである。よって、本論文は本学大学院博士（鍼灸学）の学位を授与するに値するものと認める。

（主論文公表誌）

明治国際医療大学誌 第 14 号 2016 年